

苅谷剛彦著「ガウンの街から・オックスフォード通信、 大学のカレンダーと授業 」

IDE 現代の高等教育、 525、私の大経営は危機か 2010年11月号、

IDE 大学協会、2010年11月1日刊を読む

大学のカレンダーと授業 知識観と学習観

1. 日本の大学の特徴は、講義を中心に一学期あたりにたくさんの授業を学生にとらせることにある。卒業までに必要な単位を(実際にはほぼ3年間で)取得するためには、学生たちは毎学期10以上の授業に登録し、15回分の授業が終わる度に、試験やレポートで学習成果の評価を受ける。その授業形態も、多くは予習を必要としない(リーディングアサインメントのない)、教員が話をする講義形式だから、勢い試験やレポートもそこでの講義をもとにした課題に答えることとなる。
2. このような授業と評価の形態は、知識伝達の効率性を目的にした大学教育の名残と言ってよいだろう。そこでいう知識とは、教授が伝授する知識であり、その受容とは、体系的にその知識を理解し、再現することを意味する。だから、毎回の授業でどんな知識が伝達されるのかを示す「シラバス」が重視されたり、15回分の授業がちゃんと行われたかどうか、「質の保障」のチェックポイントとみなされるのである。
3. それに対し、チュートリアルやスーパービジョンといった、個別指導を教育の中心におくオックスフォードの場合、知識の伝達と授受は、読むべき課題文献を通じてまずは行われた上で、それをどのように受容したのかを示す学生のペーパーと、それに対する教員からの質疑、それへの学生の応答、そして議論というサイクルで行われる。大量の知識を文献という形で提示した上で、それを短期集中で学生が読むという行為を通じていったん自分のものとし、さらに、その知識を用いて毎回の課題に答えていく、「書く」という学習が続く。当然ながら、読んで書くというプロセスには、学生自身の「考える」「表現する」という行為が介在する。そして、今後はそうやって表現された学生の理解や思考に対し、個別指導の場で、教師からの質疑や学生との議論が、さらなる働きかけをする。その過程を通じて、読み取り方、考え方への評価や新たな視点の提示が行われるのである。知識の加工のプロセスとしては、ずっと丁寧で複雑である。学生の判断や思考を多く経由しつつ、しかもそれへのフィードバックがある。そうやって、知識の生産につながる、知識の再生産が行われるのである。
4. その多くの部分を、学生の側に任せっきりにして、そこに教育の介入がほとんど及ばない日本(と言っても私がよく知っているのは東大の場合だ)との違いは歴然としている。あえていえば、講義を中心にそれぞれには単調な学習が、数多く複数同時に進行する大学教育と、個別指導を中心に同時展開する種類や数は少ないがそれぞれに濃密な学習が進行する大学教育との違いであ

る。

- 5．おそらく、こうした違いのさらに深部には、大学が社会のなかで果たすべき役割についての考え方の違いが反映しているのだろう。オックスフォードとの比較に引きつけていえば、「エリート」と呼ばれる人びとへの働きかけ方の違いである。これについては、いずれじっくり考えてみたい。

P75 ~ 76

[コメント]

日本の大学と英国の大学のどちらがよいかという議論はさておき、同じ大学でもこれほどの違いがあることを教育を考える人は、はっきりと認識をすべきだということだ。そのうえで日本の高等教育のあるべき姿を論じたいと思う。もしかしたら「大学の大量化」には日本の方が合致しているかもしれない。しかし、英国型で鍛え上げられた人々と一緒に仕事をしたり、競わねばならなくなったら、そう考えるとやるべきことはまだまだ多いような気がする。

- 2010年11月19日 林 明夫記 -